

資料登録カードとデータベースの連携

— 兵庫県ヘリテージマネージャー養成講習会での公開 —

史料館研究員 水口千里



▲講習会風景

当館では二〇一〇年度に資料登録カードを刷新した。その目的のひとつにデータベースの構築に利便性の高い項目設定をすることがあった（『史料館だより』三八号参照）。完成後、新着資料の登録が始まりながら作業時間が取れず、データベースの構築にはなかなか着手できなかった。しかし、今年度初めに筆者が「兵庫県ヘリテージマネージャー養成講習会」の「有形民俗文化財の登録票の作成」の講師の依頼を受けた。講習日まで半年近い期間があることに加えて会場が当館と決定したため、これを機会に資料の一部のデータベース化を試み、講習で公開することにした。

当館のデータベースの作成は、高田研究員が担当している。筆者は、開館時に受け入れた資料の記述内容を、設定した項目に置き換えデータベースの基本となるエクセルファイル作成をおこなった。それ以降の完成までの作業内容などについては後掲の高田報告を参照されたい。

註① 兵庫県教育委員会は、二〇一〇年度に歴史文化遺産を発見し、保存し、まちづくりに参画できる能力を有する人材を養成するため、有形民俗文化財の分野に関し、「兵庫県ヘリテージマネージャー（歴史文化遺産活用推進員）養成講習会」を開催した。

資料登録カードのデータベース化

史料館研究員 高田 祐一

当館は、資料を収集し、保管分類を行っている。保管分類するために、資料受入時に情報を資料登録カードに記入している。このカードによってモノ（資料）と付帯情報（寄贈者やヒアリング情報）を紐付けることができ、調査研究に活用することができる。館の重要な情報基盤といえる。

現在、当館では、資料登録カードは紙のカードである。しかし、紙のカードでは、資料情報の高度利用や情報の経年劣化を防ぐことが難しい。ある特定の資料情報を集計したりするには、手作業だと膨大な時間がかかる。寄贈者の住所など重複データについては、整合性を確保し続けるのは難しい。資料の保存状態の変化や保管場所の変更等、常にカードをメンテナンスしなければ、経年劣化を起し、使えない情報の墓場となり、情報基盤としては成立しない。

これらの問題を解決するために、資料カードのデータベース化を行うことにした。データベース化を行うために、資料カードのデータモデリングを行った。データモデリングとは、データの関係性を分析し、可視化することである。このデータモデリングの手順と実践については、ヘリテージマネージャー養成講習会で報告し、データベースのプロトタイプを公開した。今後は、水口研究員が入力しているデータをデータベースに流し込み、実運用にむけて仕上げる行う予定である。将来的には、データベースを外部公開し、一般の方も利用できるようにしたい。